

# 台湾侵攻5

空中機動旅団

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

### ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

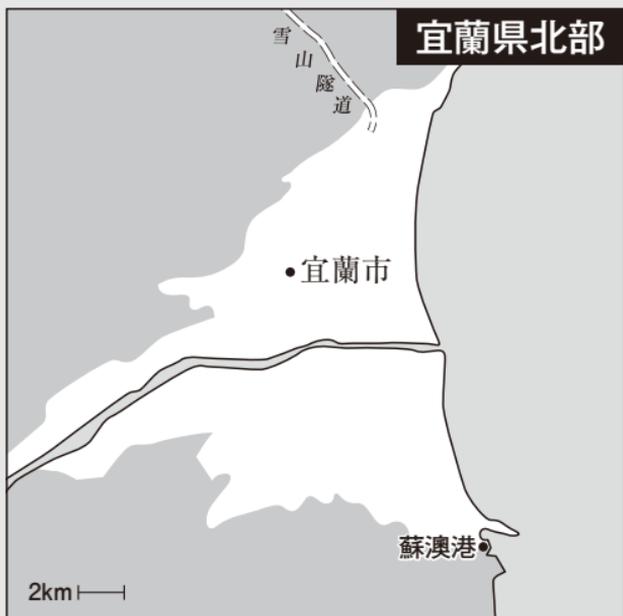
● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画  
地図  
平面惑星  
安田忠幸

## 目次

プロローグ	13
第一章 志願者	19
第二章 血の報復戦	43
第三章 デイライト	71
第四章 ボーナズ	95
第五章 桃園市	121
第六章 マトリョーシカ作戦	146
第七章 市街戦	170
第八章 宣伝都市	193
エピローグ	205

# 宜蘭縣北部



那霸市

与那国島

竹富島

石垣島

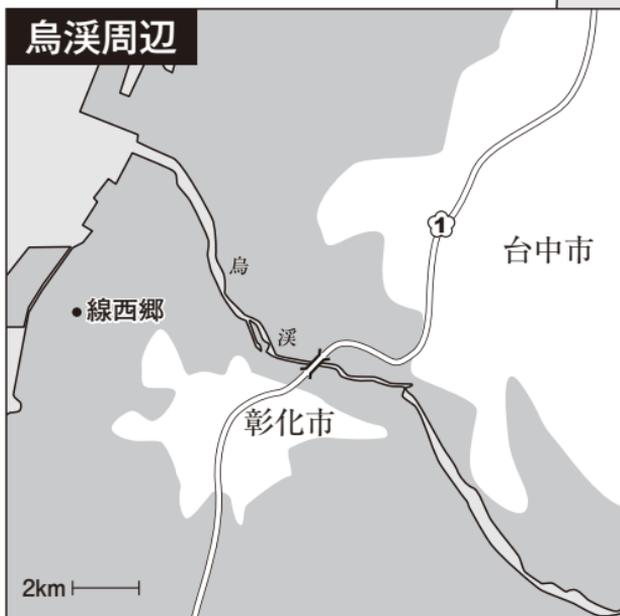
宮古島

50km



# 台湾周辺地図

## 烏溪周辺



# 登場人物紹介

## ◆日本

### ●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：ファーム。

高山健 一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦 一曹。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏 三佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課。

漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：パレル。

福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

水野智雄 一曹。元オリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

西川新介 二曹。もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニー

ドル。

小田桐将 三曹。タガログ語使い。コードネーム：ベビーフェイス。

阿比留憲 三曹。対馬出身。コードネーム：ダック。

赤羽拓真 三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：

シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。

## 〈水陸機動団〉

し ば ひかる  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。  
はく ぼ ごと  
白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

## ●航空自衛隊

### 〈警戒航空団〉

と が わけい こ  
戸河啓子 空自二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

### ・第三〇七臨時飛行隊

しん じゅう あい  
新庄藍 一尉。父親は防府の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

### 〈前線航空管制チーム〉

いの ぐら て っ べい  
猪口徹平 元一尉。民間軍事会社と雇用契約を結び復帰。濁水溪の戦闘で  
単身FACを担ったが、死亡。コードネーム：ノーザンペア。

## ●防衛省

う し じ ま や す お  
牛嶋保夫 陸上幕僚長。陸将。

## ●外務省

か た くら そう い ち ろ う  
片倉宗一郎 外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。

### 〈アメリカ大使館〉

ジョー・ストラットン 政務担当参事官。

### 〈日本台湾交流協会〉

い ず み し ろ う  
和泉史朗 台北事務所所長。事務所のナンバー3で、大使相当。外務省チ  
ャイナ・スクールの一人。

## ●内閣

あ せ ら し ろ う  
阿相士郎 総理大臣。

## ●桜会

は ま た き ち お  
浜田左千夫 元陸自三佐。関東エリアBCP（事業継続計画）本部長。

た な か ふ と し  
田中太志 元陸自一曹。八王子センター営業班員。

ち ェ ン ウ ェ ン エ  
成五岳 台湾総支社長。日本の大学を卒業後、日本で入社。

## ●コンビニ支援部隊

こ ま ゐ な み  
小町南 女子大生。中国語を勉強中のコンビニのアルバイト。

し も や ま けい ち  
霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

ち ん ね ん  
知念 小学生の娘の修学旅行費を稼ぐために参加した、流ちょうな英語を

話せる女性。

## ◆アメリカ

### ●空軍

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

## ◆中国

### ●陸軍

#### 《第2梯団》

マーシャ  
馬雄 陸軍中將。第2梯団軍団長。

ジュワンシンルー  
莊心楽 大佐。作戦参謀。

ホンジュアツン  
彭智淵 大佐。技術将校。

#### 《第7空中機動旅団》

ファンヤン  
方陽 少将。第7空中機動旅団を率いる。元は武装ヘリのパイロット。

フーパイロン  
傅柏霖 中佐。一個中隊を率いる。ヘリパイ上がり。

ドンフイミン  
薰慧敏 少佐。傅柏霖率いる中隊の副隊長。

#### 《下駄部隊》

ディンジョンウェイ  
丁仲維 大佐。大隊長。

ジョウソンイン  
周松蔭 中佐。大隊作戦参謀兼副隊長。

チェンジン  
陳智 大尉。偵察小隊長。

### ●海軍

#### 《第164海軍陸戦兵旅団》

ヤオイェン  
姚彦 海軍少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン  
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン  
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

タイイーチ  
戴一智 中佐。旅団情報参謀。

チェンシュアイ  
程帥 中尉。専門の技術将校兼雷炎大佐副官。

#### 《別働隊大隊》

ツァオホーピン  
曹和平 海軍大佐。別働隊大隊指揮官。

## ◆台湾

### ●陸軍

#### 《第10軍団》

ユーマンミン  
余明敏 陸軍中將。第10軍団司令官。

リーヨウイー  
李友宜 少将。参謀長。

ペンウェイ  
彭威 中佐。情報参謀次長。

ライルオイン  
頼若英 中佐。作戦参謀次長。

《第234機械化歩兵旅団》＝別名〈長城部隊〉

ファンジュヤン  
黄九雲 中尉。小隊長だったが、濁水溪の戦闘で所属する中隊が崩壊したため、本部管理中隊所属に移る。

フーティエンヨウ  
胡天佑 伍長。マークスマン。

《陸軍第601航空旅団》＝別名〈龍城部隊〉

フーシヤンジェン  
傅祥任 少将。旅団長。

ピンロンイ  
平龍義 少佐。第1中隊長。

ランチャーリン  
藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。コールサイン：マリリン。

ティエンズーユイ  
田子瑜 少尉。新米仕官。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

## ●海軍

《台湾海巡署》六〇〇トン型巡視艇一番艇“安平”（満排水量750トン）

アンピン  
孔竟 中佐。“安平”船長。

コングン  
頼国輝 中佐。海軍作戦本部参謀補佐。陸軍第10軍団の頼若英中佐の弟。

## ●海兵隊

《第99旅団》＝別名〈鐵軍部隊〉

アイアン・フォース  
チェンチウウェイ  
陳智偉 海兵隊大佐。一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン  
黄俊男 中佐。作戦参謀、大隊副隊長。フログマン部隊出身。

ウージンフー  
呉金福 少佐。情報参謀。

ワンイージェ  
王一傑 少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

リウジンロン  
劉金龍 曹長（上士）。コードネーム：ドラゴン。

ヤンヂーミン  
楊志明 上等兵。コードネーム：アーティスト。

## ●空軍

リーイエン  
李彦 空軍少将。第5戦術戦闘航空団（花蓮）を指揮する。

## ●その他

ファンチンチン  
范晴晴 台湾・桃園のコンビニ店店長兼本部幹部社員



台灣侵攻5

空中機動旅団



## プロローグ

与那国空港は、一大土木工事のまったただ中であつた。滑走路を東側に五〇〇メートル、西側にも五〇〇メートル延長するために、重機が深夜も動き回っている。二〇〇〇メートルの滑走路長を三〇〇〇メートルにして、大型機の離着陸を楽にするためだつた。

そして、小型機用のサイズしかない誘導路も拡幅工事が続けられていた。

それらの作業の三分の二は、本土から派遣された陸自施設部隊が当たっていた。

今は、台湾のボーイング737旅客機が時々飛んでくるだけだ。避難民を乗せて台湾を離陸し、戻つ

てくる時は、なにがしかの支援物資を積んでいく。それらの支援物資が、空港脇のフェンス沿いに無造作に積み上げられていた。空から送り届けられたものもあれば、これからまさに空路、台湾へと運ぶものもある。

コンビニこまちなみの学生アルバイト小町南こまちなみら、コンビニ支援部隊の民間人に乗せた航空自衛隊のC・2輸送機は、低く垂れ込めた雲の中を、東側海域から低空で飛んできた。

石垣島を過ぎてから五〇キロ、ずっと、高度一〇〇〇フィート以下で飛んでいた。中国のレーダーを回避するためだったが、たぶん見えているだ

ろう。向こうも、それなりの高度に早期警戒機を上げているはずだ。

だが、攻撃は容易ではない。出来ないわけではないが、航空自衛隊と海上自衛隊が鉄壁の防空態勢を整えている。

それに、この与那国まで飛んでくる輸送機を優先して撃墜する合理的な理由もなかった。

C・2輸送機は、滑走路東から真つ直ぐに突っ込んできて着地すると、一気に減速した。止まりかけたと見せた後、今度はゆっくりと速度を増して滑走路を西端まで移動した。

滑走路西端には、大型機がそこで転回できるよう、それなりの半径と幅がある誘導路がすでに増設されていた。

そこで一八〇度回頭し、離陸準備に入る。C・2は、ようやくそこで大型のランプドアを開いた。

待ち構えていた隊員が一斉に乗り込んできて、

積み込まれた小型コンテナやカートを降ろしに掛かる。全て、台湾行きの物資だ。全てのコンテナに、コンピニのマークと、日台両国旗、そして「台湾加油！」と書かれた横断幕が掛けられていた。

エンジンが掛かったままだので、キャビンは煩く、身振り手振りでしか指示は出来ない。

三〇人ほどの仲間と壁際の折り畳み式キャンバス・シートに横向きに座っていた小町は、隊員に促されてシートベルトを外し、さらに救命胴衣を脱いだ。人間基地から、長い二時間だった。窓も無くやることもない。ただ、着陸した途端、誰かがネットが復旧している！と喜んだ。

奄美大島を過ぎた頃、萎んだ状態の救命胴衣を頭から被れと命じられた時はぞっとした。てつきり、那覇かどこかで民航機やフェリーに乗り換えるものだと思っていた。そしてのんびりと、琉球列島の島々を見ながら台湾に近づくのだろうと思

っていた。

むっとする外気は、さすがに南まで来たという感じがする。後部のランプドアを、コンテナに轆かれないよう気をつけながら降りると、そこはもう戦場だった。

ぞっとするような光景が広がっていた。空港のフェンス際にはびっしりと荷物が並べられている。段ボール箱をそのまま積み重ねたような代物まである。

そして、フェンスの向こう側には、これも立錐の余地無くびっしりと人々が並んでいた。もう、何キロも、見渡す限り、人々が空港のフェンス際にへばり付いている。

だがよく見ると、日本人ではない。半分近くは、明らかに西欧人だ。皆、それぞれ大きな荷物を背負っている。

最近、ニュースで似たような光景を見た。それ

も一度や二度では無い。まずはアフガニスタンから脱出する民衆のそれ、そして、ウクライナから脱出する人々。

まさか、自分の眼でそういう光景を目の当たりにするとは思ってもみなかった。

機動隊員の誘導に従って誘導路を渡る。彼女らに代わって、C・2輸送機に乗り込む避難民の行列がようやく動き出すと、ガッツポーズを取って喜ぶ白人の若者がいた。

フェンスの向こうでは、両手で抱き抱えた子供を高く掲げている、恐らく台湾人の女性がいる。エンジンの騒音のせいでも何も聞こえないが、言っていることはわかる。この子だけでも乗せてくれ！ と叫んでいた。

与那国まで脱出できたのに、それでもここはまだ安全ではないかしら……、と小町は訝しんだ。

フェンスがほんの二メートルほど撤去されて、

そこが出入口になっている。盾と特殊警棒を持った機動隊員一〇名前後で、その開口部を守っていた。そうまでしなければならぬほど、この状況は切迫しているのだろう。

小町らは、全員がコンビニ・グループのマークが入ったベストを羽織っていた。コンビニ七つ道具が収まっている。今はもちろん、最小のサブイバルグズも入っている。左胸には、小さく日の丸の旗が縫い付けられていた。

全員が、それなりの大きさのザックを背負っていた。小町には、そのザックは大きすぎて、背負う時には助けがいるほどだ。そして、私物が入った旅行用のバッグも。

フェンスに沿う細い道に、マイクロバスが何台か停まっている。そこへと誘導される。

そのバスも機動隊員に守られている。機動隊員に避難民が詰め寄っていた。皆、紙切れを持って、

何かを喚いている。その紙切れを、彼らに渡してくれ！と求めているのだ。

恐らく、台湾に残した家族の消息を調べてくれ、報せてくれということだろう。だが、自分らにそんな余裕があるとは思えなかった。

台湾の通信網は寸断され、もちろん携帯も繋がらない。自分らが自由に動き回れても、それは無理だろうと思った。

警官隊は無下に彼らを押し戻そうとしていた。

小町は、その機動隊員の後ろから、「北京語が出来るお巡りさんはいないんですか？」と問うた。「構わずに乗りなさい！ あんたたち、無事に帰れるかもわからないのに、この人たちのことを心配している場合じゃないでしょう」

と彼女よりだいぶ年上の機動隊員が言った。

「でも、紙切れを受け取るくらいのは出来ますよね？ 向こうに着いたら、現地の役人に手渡

せば済むことです」

「一度受け取ったらきりが無い。何十万人も押し寄せてくるのに……」

「いいじゃないですか。紙切れくらい持てますよ。われわれは人道援助に行くんです」

小町は構わず、警官隊を押しつけて、北京語で話しかけた。

「あの……、約束は出来ません。何も。ただ、向こうに着いたら、台湾政府の役人に、それを手渡すことは出来ます！ 落ち着いて、それを私に下さい」

最初は、その小町の声が辛うじて聴き取れたほんの数人が動いただけだったが、案の定、どっと人が押し寄せてくる。

「言わんこっちゃない！」と機動隊が動き出し、その人の波を押し返した。

一人の中年女性が、小町の両手を握って、折り

たたんだ何かのチラシを手渡した。

「旦那と息子が、郷土防衛隊で戦っているの！ 私は無事に脱出したから安心しろと伝えて！」

小町はうっかり「必ず！——」と答えそうになったが、ただ無言で領いてその紙を受け取った。マイクロバスに乗り込むと、最後にさっきの機動隊員が乗り込んできて、束ねたメモを小町に手渡した。

「貴方の親切心が徒あだにならないことを祈るよ。何としても無事に戻ってきなさい！ 皆さんも、どうかご無事で——」

警官は、姿勢を正して敬礼すると、バスを降りた。

安全なはずの日本でこれだ。台湾に着いたら、いったいどんな混乱を目の当たりにするのだろうかと思つた。

人民解放軍が台湾南方に浮かぶ東沙島ドンシャダオへ奇襲上陸してから一七日目の朝を迎えていた。戦線は台湾の離島から日本の離島へと拡大し、尖閣・魚釣島を巡って日中が激しい戦闘を繰り広げ、やがてその戦いは、海へも空へも拡大した。

中国は、満を持して台湾本島への上陸作戦を開始すると同時に、日本と台湾双方でハイブリッド戦を展開していた。

発電所やインターネット網へのサイバー攻撃、工作員を潜入させての爆破等で、日本のインフラを破壊し、日台両国をブラックアウトに追い込んだ。そして日本へは、東京を狙ったの弾道弾攻撃が連日続いた。その規模も大きくなった。

日本ではようやく、全土での電力が復旧し、携帯やインターネットも徐々に繋がるようになった。解放軍の第2梯団が、ほぼ無傷で上陸したことを受けて、日本は、台湾への支援態勢を強化して

いた。ブラックアウト時に、唯一の街の灯りとして、地域住民を支え続けたコンビニのノウハウを台湾へ提供するための動きが続いていた。彼女らは、表向きはボランティアという立場だが、その実務を担う尖兵だった。

## 第一章 志願者

台湾海巡署六〇〇トン型巡視艇一番艇 クアンピン 安平<sup>ク</sup>（満排水量七五〇トン）は、与那国空港を見渡せる沖合にいた。

東から超低空で輸送機が突っ込んでくる。あまりに高度が低すぎて、それは船の水上レーダーに、海上移動目標として映ったほどだった。その輸送機が、西端でUターンして止まり、荷物と人を降ろし、代わりに避難民を乗せる場面を沖合から見守っていた。

いつか、こういう日が来るかもしれないと皆、覚悟していた。とりわけ、ロシアのウクライナ侵攻以降、その懸念は一気に高まった。だが、同時

にみな思考のどこかで、中国はそこまではすまいと思っていたのだ。

自分たちの同胞が台湾本土を捨て、避難民として世界に散っていくのだ。彼らが帰国する領土が未来にあるだろうか、と誰もが不安に思った。

台湾のコーストガードである海巡は、戦時にはもちろん海軍の指揮下に入る。そしてその装備も、平時と戦時では切り替えが効く。

ブリッジの真正面には、普段はロケット弾が装備されていたが、今は、艦対艦ミサイルが搭載されている。その交換は容易だった。

そして、このウェーブピアサー型巡視艇は、最

高速力四〇ノットを優に超える速度を出せる。だが今は、何にしても宝の持ち腐れだった。

海軍の僅かな艦艇は、遠く台湾本島を離れて太平洋へと避難している。台湾本島東側海域で動き回っているのは、この海巡の船だけだった。

避難民を乗せ、逆に支援物資も載せて本島と琉球列島を往復するだけだ。

「安平艦」と呼ばれる台湾海巡署の最新鋭巡視船も、今ではもっぱら台湾本島と与那国、あるいは石垣を往復している。

指揮を取るのには船長ではなく、海軍から乗り込んで来た高級参謀だった。

船長の孔<sup>コン</sup>中佐も、海軍作戦本部参謀補佐の肩書きを持つ頼<sup>ライ</sup>国輝<sup>クワイ</sup>中佐もエリートだ。孔は、台湾海巡で最も期待されるワークホースの一番艦を与えられ、頼は、代々海軍の家系で生まれ育った。

父親は著名な海軍提督だった。

国防部長の国民向け演説が、NHKラジオから流れてきた時は、頼は少し沈んだ雰囲気だった。上陸してきた敵を迎え撃った陸軍の第10軍団に、姉が作戦参謀として加わっていたのだ。

もちろん、その生死はわからない。問い合わせる術はあったが、今は戦時だ。そんなことで軍の通信網を使うわけにはいかなかった。

孔中佐は、頼と二人で船長室に籠もり、通信兵が持参した、司令部からの最新情報を読んでいた。戦況に関する軍内部向けの状況報告で、毎日発信されることになっていたが、時間は不定期だった。

第10軍団は、昨夜はどうか支えたが、損耗激しく、台湾南部の状況は極めて厳しい……、と書いてあった。盗聴されることに備えて、機微に関わる内容ではない。だが、いかんともしがたい現状はそこから読み取れた。敵に読まれるからと、戦況を盛って粹がっている余裕もないということ



だろう。

「聞いてもいいかな。お姉さんはどうして海軍ではなく陸軍に？」

「ああ、あれは、親父への反発だな。自分は幼い頃から、海軍へ行くものとして育てられた。だが、父は、姉にはそんなことは期待していなかった。

学者でも母親でも、好きなものになれ、という感じだった。ああいう接し方が姉を苦しめたんだろうと思う。だから、父親への反抗として陸軍に入った」

「しかし君は、海軍に入ったからと、楽が出来たわけでもないだろう？」

「いろんな後ろ盾がなかったか？　と云えば嘘になる。同期の中で真つ先に昇進するだけの成績は出したつもりでも、どうしても親父の名前は付きまとうものさ」

「作戦本部について——」

「いや、海巡部隊への配属を願い出たのは自分からだ。太平洋のご真ん中で、出番もなく漂流する艦隊で無駄飯食うのはまっぴらだし、司令部に留まったからと、何かの仕事があるわけでもない。忙しくしていられる分、この任務はまじだよ。われわれは祖国に尽くしている。たとえただの輸送業務だとしても」

航海班員がドアをノックして開けた。

「日本の巡視船が間もなく出航するようです」

「次はわれわれが入って良いのか？」

「はい、確認しました。入港許可が出ました」

「よし、行こう！——」

ブリッジに上がると、丁度、海上保安庁の巡視船が、与那国空港の西端にある久部良港くぶらを出港するところだった。さほど大きな港ではない。フェリー一隻が入れば、それでいっぱいになるような、漁港をちよっと大きくした程度の港だ。港の西端

には、日本最西端を示す記念碑が立つ丘がある。

今は、海上保安庁の大型巡視船が、避難民を後送<sup>そう</sup>するために出たり入ったりを繰り返している。

もちろん、台湾本土から、漁船や何やらで脱出してくる船舶もいたが、それらは別の港へ迂回するよう命じられていた。それらの取締は、台湾海巡と、海上保安庁が共同で行っていた。

ブリッジの船長席に座ると、孔船長は、船内マイクを手にとった。

「みんなそのまま聞いてくれ——。海軍司令部からの最新情報だ。すでに日本のラジオ放送で聞いたように、昨夜、濁水溪で、凄まじい戦闘があった。解放軍は、空を飛ぶホバーバイクや電動キックボード<sup>ジュオシユイ</sup>を駆使して陸軍を翻弄し、一度は濁水溪<sup>シ</sup>の渡河に成功し、第10軍団は潰滅する寸前まで追込まれた。だが、ラジオで聞いた通りの状況で、部隊は、すんでのところで救われた。軍は、

この戦いは厳しいという認識を持っている。今後もし支えられるかどうかはわからない。

そして、台北の戦いだ。陽明山<sup>ヤンミンサン</sup>に上陸した敵は昨夜は沈黙していた。彼らに補給物資を届けようと、解放軍は、大型ドロインの編隊を組んで海面低く飛ばしてきたが、自衛隊がこれを発見、イージス艦によって全機叩き墜した。全員、洋上への監視を怠るな。

残念だが、われわれにはドロインで補給物資を届けるような余裕は無い。そういう代物が視界に入ったら、それは敵のものだと思え。以上——。では、入港する。避難民が見ている。接岸作業は優雅に、きびきびとやってみせよう！ それと、各部署、人を上に上げてくれ。巡視船に挨拶しなきゃならん。航海長、出港する巡視船に対して、ぎりぎり安全な距離まで接近してくれ。航過後、入港する」

孔と頼は、乗組員らとともに、ブリッジからウイングに出て、さらにブリッジ前のキャットウォークに、等間隔で並んだ。これが、軍艦ではなく巡視船である所以だ。

レーダー反射を増すような無用な構造があちこちにあった。

巡視船が港から出てくる。確か一千トン型巡視船だが、大きさは実際は一七〇〇トンはあるはずだ。ヘリコプター格納庫はないが、ヘリコプターデッキはある。

ブリッジ前に並び、出港する巡視船に敬礼しようとして構えていた乗組員たちは、その船の状況に息を飲んだ。

舳先から、ヘリコプター甲板に至るまで、びっしりと避難民が乗っている。甲板上は避難民で溢れかえっていた。

巡視船の乗組員が身振り手振りで、立つな！

屈めと命じているが、避難民らは我先に舷側へと寄り、こちらへ大きく手を振ってくる。

恐らく何百人もがああデッキ上にいるはずだ。こんな数の民間人を乗せて外洋を航海するのは無謀だと思った。

「総員、海上保安庁巡視船に対し、敬礼！——」  
「まさか、あの状態で那覇まで向かうのか……」

と頼中佐が漏らした。

「さすがにあの数では無理でしょう。石垣までが限界じゃないかな」

千切れんばかりに腕を振ってくれる避難民が不憫だった。頼は、せめて彼らの無念を晴らせる日が来ることを祈った。姉の仇を自らの手で討てることを。

小町らに乗せたマイクロバスは、いったん港へ寄った後、荷物の運び込みに時間が掛かるとい

ことで、そのまま湾沿いに走り、日本最西端の地へと向かった。

観光している状況下にならないことは明らかだったが、車内に留まってもすることはないので、全員、バスを降りて記念碑がある丘まで歩いた。

与那国は面白い島で、沖繩の離島としては大きな部類に入る。差し渡しは一〇キロもあり、中央部は高度二〇〇メートルを越える山脈も走っている。与那国富士として愛される宇良部岳は、標高二三二メートルもある。

バスの運転手の話では、年に何度か、台湾が見える日もあるが、百キロ以上離れている。普段は見えないとのことだった。

携帯は通じている。日本はこのところ、電気もインターネットも落ちてブラックアウト状態の酷い数日間だったが、徐々に日常を取り戻しつつある。その間の日本のライフラインを支えたのは、

今や郵便局より増えたコンビニだった。今度はそのコンビニのノウハウで台湾人を助けようというのが、この計画というか作戦だった。

全員で写真を撮り合った。ここが日本の最西端と言われてもピンとこないものがある。だが、全員でここに戻ってこられるかどうかはわからない。ここが、日本で踏む最後の土になるかも知れないことは皆覚悟していたが、会社は、それなりの報酬を出してくれる。

誰かが、自分たちは、戦争の犬、金のために戦う傭兵みたいものだ、と自嘲していた。

3・11の大津波で家族全員を失った小町にしてみれば、天涯孤独の身の上、お金は要るし、自分が死んでも悲しむ人間はいなかった。

中国企業に就職するつもりで北京語の勉強を始めたが、日中関係がこう拗れては、それは難しそうだ。だが、この戦争が台湾の勝利で終われば、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。